

## 5 舞鶴引揚記念館

舞鶴市

繰り返してはならない戦争の悲劇、引き揚げの歴史を長く後世に伝えるために昭和六十三年（一九八八）に開館された舞鶴引揚記念館は、舞鶴港とともに平和の尊さを訴え続けています。第二次世界大戦が終わったとき、海外に残された日本人は軍人、軍属が三百三十万人、民間人は三百万人を越えました。政府は昭和二十年（一九四五）九月二十八日に、舞鶴、浦賀、呉、下関、博多、佐世保、鹿児島、横浜、仙崎、門司を引揚港に指定して、速やかな帰国への業務に取り組みます。中でも舞鶴港は十三年間にわたってソ連、中国などからの引揚者八十六万人余りを迎え入れました。せっかく祖国まで辿りついたのに援護局内で亡くなった人は三百六十人、また親を失った孤児も百一名にのぼったのです。

舞鶴引揚記念館は、この歴史を風化させることがないようにと、過酷な収容所のような状況を再現する模型や抑留生活で強いられた労働の実態を記録した写真や絵、彫刻を展示しています。シベリアでの松や楡などの大木の伐採、鉄道工事、石炭の運搬といった重労働は零下三十度から四十度の厳寒の中でノルマを達成しなければなりません。その達成度によって食糧のコーリャンやアワのおにぎりや黒パンの配分も決められ、その分配用に小石でつくった天秤や、手づくりのスプーンが寄せられていて、耐乏の日々を彷彿とさせます。

来館者はヨーロッパや韓国などからも訪ねる人があって舞鶴の町にくりひろげられた「岸壁の母」や「異国の丘」の歌に秘められた人間ドラマを熱心に見学します。

学校の生徒に語り部として体験を語るのは平成四年（一九九二）に発足した「引揚を記念する舞鶴全国友の会」の語り部の会のメンバーです。釜山から舞鶴港に入った引揚船第一号雲仙丸で帰国した神原満さん（七十五才）は特攻隊員として出陣する予定でした。自分が生きているのは、たくさんの方が亡くなって生命をもらっているからで断腸の思いである。その申し訳なさを抱きながら、発展途上国の人たちの食糧問題にも関心を持ち続けています。

半農半漁の仕事をしていた森下義晴さん（七十八才）は、シベリアに四年間抑留されていて昭和二十四年（一九四九）六月二十七日にナホトカから舞鶴港へ。父はこの年の四月に亡くなり、兄はニューギニアで戦死でした。木材の伐採をともにした戦友は、米のご飯とぼた餅を食べたい、と願いながら、木の板に外套を敷いたベッドで息絶えたのです。子どもたちが戦争を当たり前のことのように思わない教育が必要だ。そんな期待を込めて歴史の事実を伝えたいと記念館に足を運びます。



メモ●「引揚記念館」は、JR舞鶴線東舞鶴駅より京都交通バスで約15分「記念公園前」下車すぐ